国立歴史民俗博物館・青木隆浩　編『人と植物の文化史―くらしの植物苑がみせるもの―』

古今書院　2017年５月　180頁　3,200円＋税

1995年に開苑した国立歴史民俗博物館の「くらしの植物苑」が20周年を迎えた2015年，第97回歴博フォーラム「人と植物の文化史―くらしの植物苑がみせるもの―」が開催された。本書はこのフォーラムに基づいた「くらしの植物苑」の20年間の活動記録であると同時に，これまで開催されてきた様々な企画とそれに関わった人たちの経験を振り返り，あらためてその意義を問う一書となっている。

古くから人は植物を「食べる」，「治す」，「染める」，「道具をつくる」，「塗る・燃やす」，「織る・漉く」など，食生活，衣生活，生活技術に利用してきた。色とりどりの美しい草花を鑑賞する目的ではなく，「生活の基盤となる植物のさまざまな素材を野外展示することを意図して（i頁）」くらしの植物苑はつくられた。そして，人が生活することによって形成される文化景観の再現を目指すとともに，博物館の展示とも連携し，まさに屋内と野外による連続一体の展示が試みられてきた点が大きな魅力である。当苑は人と植物のかかわりを研究する場であると同時に，研究を通して明らかになったことを，展示を通して公表していく場でもあるという相互関係の中で，これまで様々な企画が展開してきたのである。その具体的な足跡を本書から見てみよう。まず構成を示せば下記のようになる。

フォーラムの開催趣旨
第Ⅰ部　くらしの中の植物たち
　1　植物の日本史を展示するくらしの植物苑
　2　縄文人の植物質食料と木の道具
　3　ジャパンと呼ばれた漆器
第Ⅱ部　季節の伝統植物
　4　伝統の桜草―レスキューさくらそう―
　5　伝統の朝顔
　6　伝統の古典菊
　7　菊栽培の流行と小袖模様
　8　参勤交代と菊作りの広がり
　9　冬の華サザンカ
第Ⅲ部　植物園の意義
　10　植物を鑑賞に供する文化の誕生と発達

本書はⅢ部から成り，第Ⅰ部「くらしの中の植物たち」では常設展示に関連した３つの報告がなされる。続く第Ⅱ部では，特別企画「季節の伝統植物」が取り上げられ，６つの報告で構成されている。最後に第Ⅲ部ではより広い視野から，くらしの植物苑の「植物園」としての位置付けが再検討され，今後の展望が述べられている。

以下，内容を追ってみよう。まず第Ⅰ部では，「植物の日本史」というテーマの中で，私たちが桜を植えるのはなぜか，桜はいったい何の役に立っているのか，桜と人とはどのようにかかわってきたのかと問いかけ，人と桜の間には精神的に深いかかわりがあることが示される。桜は一例であって，松や欅，槻なども同様に人びとのくらしの中に根づいている。

「毎日の生活をとおして人はどのような植物とどのようなかかわりをもってきたのか」という問題意識は，歴史地理学の分野でいえば有薗[1]によるヒガンバナについての一連の研究とも共通する。ヒガンバナは人のくらしがある場所にしか生息しないため，ヒガンバナが咲く景観には人のくらしの痕跡を見いだすことができるという議論は，植物が歴史の資料になり得ることを示している。

植物を歴史の中に位置づけるという視点は，歴史民俗博物館の重要なコンセプトである。長期的な視野から，つまり後期旧石器時代から縄文時代，弥生時代を経て，近世そして近代へと日本列島の生態系がいかに変化したかを明らかにしたうえで，時代ごとの出来事と結び付けて植生や植物の利用が論じられる（８頁）。これは，近年の気候歴史地理学の成果とも関わり，また，歴史学のみならず，民俗学，考古学など多分野との連携があって初めて可能となる研究である。

その具体的な成果はまず，「縄文人の植物質食料と木の道具」という論考で示されている。有機物が腐らずに残る低湿地遺跡から出土するクリ，トチノキ，ウルシなどの木，クルミ，ドングリ，クリ，ヤマグワ，ヤマブドウ，アサなどの種実，ノビルやユリ根，ルツボなどの鱗茎類の痕跡から，道具，食べもの，衣類，そして酒や油の利用を推測していく話は当時のくらしが目に浮かぶようで興味深い。とりわけクリは積極的に管理・栽

培されてきたのではないか，という議論は，狩猟採集とは異なる縄文時代像の提示へとつながり，歴史地理学でいえば，文明史と地理学を結びつけた元木の成果[2]と呼応する。

美術史の分野からウルシの木と漆の文化を論じた「ジャパンと呼ばれた漆器」では，漆の利用が日本で古い歴史を有しているというだけでなく，アジア特有の工芸技法としての空間的広がりを持っているということが論じられている。アジアの文化に育てられた多彩な漆工芸の１つとして，16世紀半ば以降，日本の漆器はヨーロッパで高く評価され，世界へと広がっていくことになる。この成果は「海を渡った漆器」と題した特集展示でも公開され，2017年夏には考古・民俗・歴史・美術・植物学など多分野にわたる共同研究による成果が企画展示「URUSHIふしぎ物語―人と漆の12000年史―」に結実した。地理学において漆器はいわゆる地場産業研究などで取り上げられることが多かった。しかし，上記のような一連の研究から，原料である漆に焦点を当てることでアジアを視野にいれた人と植物の関係史という議論が可能になり，また，漆が「ジャパン」と呼ばれる経緯に触れることで，文化交流史を描くこともできると気づかされた。

第Ⅱ部は「桜草」，「朝顔」，「菊」，「サザンカ」という江戸時代から親しまれてきた日本の伝統的な植物を通して春夏秋冬と人びとのくらしが描かれる。このうち，編者が指摘するように，とりわけ1999年に開催された「伝統の朝顔」展はくらしの植物苑にとって大きな節目となった。当苑の展示をきっかけに，私たちにとって身近な植物のひとつである朝顔に，これほど魅力的な歴史があったとは，と驚いたのは評者だけではないのではないだろうか。加えて重要なのは，朝顔はそれに熱狂した人びとの存在や，流行の動向を知る重要な歴史資料としての意義も合わせもっていることであろう。それを広く伝えたのは，この伝統の朝顔展にほかならない。

さくらそうもまた身近な植物である。しかし，じつは単に「さくらそう」というだけでは説明できない多くの種類が存在するというのも初めて知ることであった。さくらそうは野生原種と園芸品種があり，園芸品種にはさらに明治以前の品種である「古花」と明治以後の品種である「新花」に分類される。これらの品種名の判定と苗の配布と普及，趣味家の育成に大きな役割を果たしてきたのは全国に展開する「さくらそう会」である。興味深いのは，江戸時代にも優秀花をつくるために競い合う組織である「連」という組織が存在し，さくらそうを栽培するにはこの「連」に入門することが必須条件であったということである。この競い合いの中で江戸時代には約500種類のさくらそうが生まれたといわれる。いつの時代も植物に魅せられた人びとがいて，ある種のコミュニティが形成され，それが植物の姿や品種に深く関与してきたという歴史は朝顔とも共通する。今日の「さくらそうの会」と江戸時代の「連」との間にどのような連続と断絶があるのか，一度考えてみたいテーマである。

菊については菊の園芸書を中心に論じた「伝統の古典菊」，菊栽培と小袖模様の流行が連動するというユニークな発見を提示した「菊栽培の流行と小袖模様」，江戸と地方の文化交流としての菊栽培を論じた「参勤交代と菊作りの広がり」という３つの論文が新知見を披露している。時代とともに園芸人口が増加する中で，「菊」という花はとりわけ特別な存在であったことが豊富な園芸書，小袖，番付に描かれた様々な菊に関する文書や絵から伝わってくる。参勤交代をきっかけに，故郷に菊の技術書や道具，種子を持ち帰る藩士の物語は，第Ⅰ部で扱われた漆と同様，人と植物の関係の空間的な広がりを分析した好例であり，歴史地理学にも大いに参考になる。

このなかで評者にとって最も印象深かったのは，「江戸時代の小袖に見る菊の模様が，菊栽培の流行と深くかかわっている（105頁）」という指摘である。着物の意匠は時代の流行を反映したものであるということは自明のことながら，そこに花の流行や栽培技術が深くかかわっているという発見には目から鱗が落ちる思いがした。農業史，技術史，商品史，経済史などが交差する分析は独自性があり，魅力的である。評者自身も今後試みてみたい。

ツバキの仲間であるサザンカは，「冬の華」として展示が重ねられてきた。日本全国に自生するヤブツバキ，日本海側の多雪地帯に適応したユキツバキ，奄美から沖縄に野生するヒメサザンカに対して，サザンカは九州・四国から沖縄を原産と

している。サザンカもまた園芸品種が多く生まれた植物であり，江戸時代のはじめ頃にその品種が急激に増えた。品種改良の歴史はなんと400年以上あるといわれる。

第Ⅰ部が食用や道具，衣類としての植物であったのに対し，第Ⅱ部は観賞し，愛でるための植物について論じたものが多かった。このように，「物を利用するだけでなく，「鑑賞」するようになったのはいったいいつからなのであろうか。この問いに答える第Ⅲ部では，「植物を観賞に供する文化の誕生と発達」と題して，日本と世界の人と植物の関係を「薬草」をキーワードに論じている。

園芸とは語源的には「中庭における植物栽培」であり，最初の園芸植物とは薬草であった。個々の屋敷の中庭や城館内に設けられた空間で栽培された薬草は次第に体系的に分類され，一箇所に集められて栽培されるようになった。これが「薬草園」のはじまりである。そうすると個々の屋敷や城館内の中庭では薬草を栽培する必要がなくなり，まず薬草の代わりに香草や果樹，野菜が植えられるようになった。その後，次第に香草などの栽培は部分的となり，観賞用で娯楽性を含んだ花卉園芸が発達した。加えて18世紀のヨーロッパではヨーロッパ外部から持ち込まれる植物も増え，分類が求められるようにもなった。こうした背景があって分類花壇が整備され，18世紀末には都市の文化的成熟を示す施設のひとつとして大温室の植物園が誕生した。そして今日，植物園は観賞，娯楽性だけでなく，植物についての研究と教育をも担うようになったのである。

以上の内容をふまえて，本書の２つの成果と課題を述べ，結びとしたい。本書の第１の成果は，人と植物の「文化」史としたことで，植物を栽培するという行為だけでなく，その背景にある人びとの精神や動機，趣向，価値観，くらしの様子，時代の要請などを含みこんだ議論が示されたことである。植物をいかに栽培するか，という「生産」の視点だけでなく，いかに用いてきたか，いかに楽しんできたか，という「消費」や「利活用」の視点が加わったことが重要である。例えば現代の日本に見られる渥美半島の電照菊，千倉の切り花，大宮の盆栽，八丈島の観葉植物，八ヶ岳山麓の花苗などの栽培地域が形成される背景にはいったいどのような需要の歴史や社会の変化があるのだろう。評者が現在所属するいわゆる農学部では，植物について生物学あるいは生態学の視点から考える学生が非常に多い。だからこそ，「人」を介してはじめて見えてくる文化史，くらしの歴史という視点から多面的に植物を描く本書をぜひ彼らと読み，議論を深めてみたいと思っている。

第２の成果は，かなり長期的な時間軸を設定し，人と植物の多様性に富む関係史を描いたことである。縄文時代から現代までを通して議論することが可能であるのは，いつの時代も私たち人間が植物と何らかのかたちでかかわり続けてきた証拠でもある。先日の新聞に，農業・食品産業技術総合研究機構とサントリーのチームが青い菊を咲かせることに成功したという記事が掲載された(2017年７月27日，東京新聞)。品種改良に対する熱意と挑戦は今日に至るまで絶えず続けられてきたことがわかる。「人と植物の文化史」に現代につながる身近な歴史としての魅力を感じる読者も少なくないのではないだろうか。

最後に今後の課題として，空間軸を加えた分析の深化を挙げておきたい。第Ⅰ部の漆でアジア圏の広がりに言及し，第Ⅲ部ではヨーロッパの園芸に言及しているように，人と植物の関係史は様々な国で展開した歴史である。海を渡った植物，文化伝播や交流の要となる植物，世界を席巻するほど流行となった植物の物語[3]から新しい歴史地理学を描くことができるかもしれない。自分自身の課題という意味も含めて，本書に続く，人と植物の地域史や世界史[4]という構想の実現を期待せずにはいられない。

（湯澤規子）

〔注〕

1）有薗正一郎『ヒガンバナが来た道』海青社，1998。有薗正一郎『ヒガンバナの履歴書』あるむ，2001。有薗正一郎『ヒガンバナ探訪録』あるむ，2017。

2）元木　靖『クリと日本文明』海青社，2015。

3）アンナ・パヴォード著，白幡節子訳『チューリップ：ヨーロッパを狂わせた花の歴史』大修館書店，2001。

4）柴田道夫『花の品種改良の日本史』悠書館、2016は豊富な資料が掲載され参考になる。